

2019年1月18日（金）

## ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 梁亜旋さん・松平莉奈さん 共同 WS 絵巻と版本—それぞれのテーマ—

### 1, 初めての合同 WS

公募を経て今年度新たに AIR としてないじえる芸術共創ラボに参加していただいた 梁亜旋<sup>りょうあせん</sup>さんと松平莉奈さん。お二人ともジャンルは違いますが、視覚芸術の分野で活躍しておられる新進気鋭の若手作家です。

この度初めて合同 WS を開催し、抱いておられるご関心についてお話しをしたり、それぞれの興味に沿ってご紹介した資料と一緒に



見て意見交換をする場を設けました。

<sup>1</sup> 2018年8月3日のWS。詳細は、ないじえる芸術共創ラボ HP 上の「古典インタプリタ日誌」  
(<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html>) をご参照く

### 2, 絵巻を見る

絵巻に関心を持っておられる梁さん。以前の WS<sup>1</sup>でご覧になった卷子本『百鬼夜行図』<sup>2</sup>からインスパイアされ、作品を創作する計画を立てておられます。

梁さんは、巻物（<sup>かんすほん</sup>卷子本）が、大切な事柄や秘すべき事柄を記す形体の書物として扱われている、ということにロマンを抱かれたと教えてくださいました。

梁さんは、以前の WS で卷子本の扱いを学んでおられますので、今回はその復習も兼ねて、ご自身でも『百鬼夜行図』を開いていただきました。慎重に、しかし確実な手つきで卷子本を扱っておられます。



ださい。

<sup>2</sup> 当館蔵。 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200016403/viewer>

2019年1月18日（金）

卷子本は全てを一気に広げることはせず、肩幅程度の間隔で広げて、右から左へと少しずつ鑑賞します。



また今回は新たに、当館に所蔵されている美しい絵巻『伴大納言ぼんだいなごん絵詞』<sup>3</sup>をご紹介しますことにしました。

本作は、貞観8年（866）春に起きた応天門の放火事件に題材を得たもので、伝本の内の一です。時の大納言ともによしお伴善男が政敵の左大臣源信まことを失脚させるため、京の重要な門の一つである応天門に火を放ち、その罪を源信に負わせるが、かえってその陰謀が露見し、失脚するといういわゆる「応天門の変」を絵と言葉とで語るものです。



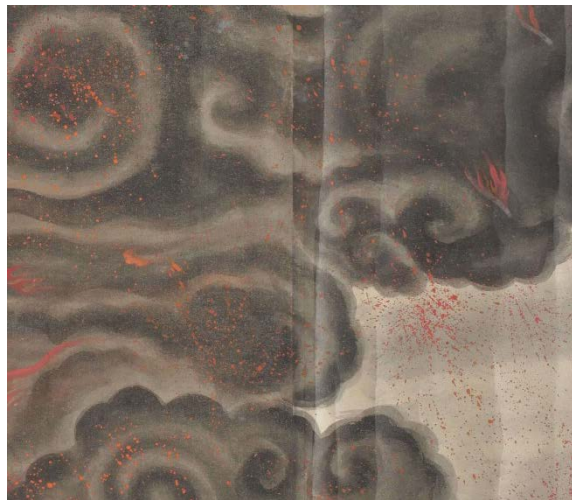
一気に全体が見えないため、続きが気になっても少しずつ鑑賞するしかありません。冊子本ならばいつでも好きな場所を開いて、進んだり戻ったりできるのですが、卷子本は皆が同じペースで順に見てゆくことになります。

私は隣で見えていましたが、『伴大納言絵詞』のようにストーリー性の高い作品は特に、次はどうなるのかとじれったくもあり楽しみでもあり……絵巻特有の鑑賞の面白さを体感しました。

<sup>3</sup> 当館蔵。 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200013707/viewer>

2019年1月18日（金）

『伴大納言絵詞』の初めの見所といえば、まずは応天門の火災ではないでしょうか。紙面にダイナミックに広がる黒煙と炎、細かく描写された火の粉は大変な迫力です。



火の粉部分の拡大

ところで、この火の粉はどのようにして描くのでしょうか、と、日本画家の松平さんにたずねてみたところ、筆のコシを使って飛沫を出して描いたのかもしれないとのこと。他にも、息を吹きかけたり、網に筆を擦って飛沫を出す方法もあるそうです。

また、透け感のある着物などはどう描写するのかがあったところ、「先に下の色（透けて出る色）を塗り、その上からさらに色を重ねるのだと思う」と教えていただきましたが、それでこのような透明感がでるのでしょうか。

是非実演を拝見したいところですが、いつもこのような絵画作品を見ては疑問に思っていたことについて、実作者の方に教えていただき、ありがたく思いました。



2019年1月18日（金）

また、本作には沢山の人が描かれている場面が多くありますが、一人ひとりの表情や着物が大変詳細に描かれており、大勢で囲みながらわいわいと鑑賞すると、さまざまな気づきがあります。鑑賞の形体を想定して、このような細かいところにも力を入れたのでしょうか。



群衆部分の拡大

<sup>4</sup> 江戸時代に出版された、大人向けの絵入読み物。

### 3, 版本を見る

古典籍における文字と絵の密接な関係に惹かれているという松平さん。前回のWS（12月19日）では黄表紙<sup>4</sup>を扱ったので、江戸時代の絵入版本をご覧いただくことにしました。



特にご覧いただきたかったのは、合巻<sup>5</sup>の板木です。当館にはいくつか、江戸時代に出版された作品（当時は木版印刷が主流でした）の

<sup>5</sup> 黄表紙が長編化した形体の絵入読み物。黄表紙よりも絵と文字が

2019年1月18日（金）

板木が所蔵されています<sup>6</sup>。



入口敦志先生（当館教授）によると、日本の板木はアジアの他の地域のものにくらべると、彫りが浅いのだそうです。実見すると一目瞭然ですが、文字も絵も大変細かく繊細で、この浅さでなければできないのだろうな、と思います。

いらなくなった板木をお盆として再利用している例もあり、松平さんは目を輝かせてご覧になっていました。

---

細かく刷られている。



また、黄表紙の見返し部分や裏表紙に「此本の主〇〇」などと、元所有者の名前が書いてある本もあり、今自分が手に取っている本が、昔も誰かに読まれたものだったということが実感できます。

古典籍には、テキストの内容以外にも大量の情報が詰まっているので



<sup>6</sup> 『魚貝譜』『新編金瓶梅』など。

2019年1月18日（金）



冊子本の形体を観察する

#### 4,おふたりのこれから

この日ご覧いただいた古典籍は、絵入のものばかりでした。絵画や造形の世界で活躍しておられるおふたりは、絵の中の人達の髪型や、着物の着こなし、柄に注目されたようで、お二人で着物の模様についてお話をされたようでした。

ご自身の創作の手法や、古典籍へのご関心の在り方は異なるお二人ですが、同じ点に注目されたというお話をうかがい、大変興味深く思いました。

年度末をひとつの踊り場と考え、お二人にはWSを通して得たアイデアについて何か形にしてください、とお願いしてあります。

それぞれどのような古典籍やモチーフをテーマに選び、どのようにご自身の創作に落とし込んでゆかれるのか、とても楽しみになった回でした。

ないじえる芸術共創ラボに参加されているAIR 同士の交流によっても、思わぬ化学変化が起こるのではないかと期待しています。

